

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！

# ネットワーク

特集

## 記憶を紡ぎ、未来へつなぐ

- あらかわひと・暮らし伝承の会
- 南方特別留学生を語り伝える会
- 練馬女性史を拓く会
- 記憶をつなぐ人びとの営みによせて  
平野 泉（立教大学共生社会研究センター）



このコーナーでは、  
毎回一つの団体取材し、  
活動内容やそこで活動  
するボランティアさんの  
生の声をお届けします。



ガザに暮らす子どもが書いた絵を見て、感じる・わかることを考えてみる

## 若者同士で世界を考える 私たちにできることって？

～パレスチナ子どものキャンペーン

ネットワーク編集部

今年初めて夏の体験ボランティア（以下、夏ボラ）にプログラムを提供してくれたパレスチナ子どものキャンペーン（以下、CCCP）。団体名にもある「パレスチナ」では、今もなお悲しい出来事が毎日、毎秒のように起きています。どうしてそんなことが起きているのか、日本にいるからこそできること、若者だからこそ考えられることを、参加者全員で考え・話し・共有するワークショップについてレポートします。

夏ボラからの参加者は、ワークショップでファシリテーターを担当しました。中学1年生から大学生までの様々な年代の人が応募し選考された9名。事前にワークショップの流れやファシリテーターについて学ぶ説明会があり、その中で特に戦火の激しいガザ地区に関するニュースや現状に関するミニポスターの作成もして当日に備えました。「難民について関心があった」「夏ボラのチラシを学校で見ると楽しそうと思った」とワークショップへの期待を膨らませます。

いよいよワークショップ当日。公募等で集まったワークショップの一般参加者は20人以

上。全員が夏ボラの参加者と同じ年代の若者です。「平和について学びイベントを探している見つけた」「学校やニュースでガザの話を聞いてもっと知りたいと思った」「自分に何ができるのか考えて持ち帰りたい」と参加の理由は様々。

まずは実際にガザ地区でも活動するCCCPスタッフの方による講義をみんなで聞きます。中高生にも分かりやすく、大人の私たちが聞いても「そうだったんだ」と納得するような歴史的背景等をイラストや資料を用いながら講義していただきました。初めて知ることや「どうして？」と思うことばかりのパレスチナやガザの



グループで話し合ったことをみんなの前で発表する。様々な意見があることを学ぶ



夏ボラ参加者が作成したミニポスター



### イベントを担当した団体の 内間さんからコメントを いただきました

ガザの人道危機が始まって以降、当会には多くの若い世代からパレスチナに対して「何かしたい」、「パレスチナについてもっと知りたい」というお問い合わせをいただき、そんな彼らの声に応えたいという想いから今回の企画は始まりました。中高生対象の参加型ワークショップ開催という初の試みながら、夏ボラの申し込みは私たちの予想を上回り、皆さんの関心の高さを改めて感じました。

夏ボラの皆さんと参加者の皆さん、同じ目線から自分たちのいる環境や持っているもので今、パレスチナに何ができるのか、真剣に時に頭を悩ませながら話し合う姿を見てこのイベントを開催した意義を感じました。この日皆さんが考えたことが、「何かしたい」「知りたい」の一助になったのであれば幸いです。

現状に驚き、悲しみを覚えました。

そしてグループ内で学んだことや感じたことをシェア。「私たちができること」も合わせて考えます。「知って、伝えて、行動するのが大事だと思った」「地上から支援するのが難しいけれど、空から支援できないのかな」「今日学んだことを学校で発表して、支援金を集めてみたい!」「それぞれの立場で正しさがあって、見方によって意見が変わってしまうことに気づいた」「正しい情報を知って、発信することは大事!」「グループのメンバー全員が分からないこともたくさんあったけど、みんなで意見を出し合って考えることができた」と皆さんの気づきや意見をみんなで共有。自分自身ができることを考え続ける大切さを実感しながらワークショップは終了。

日本から遠く離れた場所で起きている悲しい現実。けれどもそこに生きる人たちは私たちと同じ世代や年下の子どもたちがたくさんいて、同じ地球で生きている。そんなことを学び、想いを共有できたワークショップでした。

### 認定 NPO 法人 パレスチナ子どもの キャンペーン



HP



X



Instagram

特集

## 記憶を紡ぎ、未来へつなぐ

- 5 伝えていこう。地域の先人たちの、福祉の足あと  
◇あらかわ ひと・暮らし 伝承の会
- 7 歴史を見て、振り返り、つないでいく  
◇南方特別留学生を語り伝える会
- 9 地域で女性の歩みを記録する  
◇山崎 雅子 練馬女性史を拓く会、立教大学兼任講師
- 11 記憶をめぐるア・ラ・カ・ル・ト
- 13 記憶をつなぐ人びとの営みによせて  
◇平野 泉 立教大学共生社会研究センター・アーキビスト

- 1 思い立ったがボラ日 若者同士で世界を考える 私たちにできることって？  
◇バレスチナ子どものキャンペーン
- 15 セルフヘルプという力 第37回  
障害のあるすべての女性の権利擁護を考える  
◇DPI 女性障害者ネットワーク
- 19 スタッフAの町内会物語【3】『令和の改新』始まる!?
- 20 つぶやきブレイク vol.34 一人ひとりが自分らしくあるために
- 21 せかいをみる⑩  
銃ではなく、カメラを持った人々の制作を支える ～記録を続ける人々と共に～  
◇久保田 徹 一般社団法人 Docu Athan 代表理事
- 23 編集委員企画第3回 あの日から始めたこと  
◇片岡 紀子 学校地域コーディネーター、保育士、  
NPO 法人患者スピーカーバンク事務局
- 25 いいもの みい～つけた！ Vol.51  
月日のうつろいをいろいろるカレンダー  
◇NPO 法人 TDU・栗穿大学



### 表紙のことば

ちちははの記憶はいつも  
至らなかつた私の記憶と重なって  
少し苦しいけど  
太古から紬ぎ繋いできた  
幾億のちちははの記憶を寿げば  
私もまた宇宙の記憶のひとつ  
—フローラル信子

## もしもボランティア活動中にケガをしたら… ケガをさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。



東京都社会福祉協議会指定生損保代理店  
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2  
研究社英語センタービル 3階

TEL. 03-3268-0910  
FAX. 03-3268-8832





特集

# 記憶を紡ぎ、 未来へつなぐ

移り変わる社会の中で、記憶の風化にあらがい、時代を生きた人びとの思いやさまざまな努力を拾い上げ、記録し、今を生きる人びと、さらには後世に伝えていこうとする取り組みがある。

「残す」こと、「伝える」ことの意義とは。「残す」「伝える」営みから見えてくる大切なものは何か。市民活動の視点から考えてみたい。

あらかわひと暮らし 伝承の会

中村 訓子さん

日時：2023年5月13日（土）14:00～15:30

会場：サンパール荒川4階 第2・3集会所

参加費/無料 資料代100円

あらかわひと暮らし 伝承の会

男性介護者 おやじの会

日時：2023年1月28日（土）14:30～16:00

会場：ふるさとつらつぱり3階多目的スペース

参加費/無料 資料代100円

あらかわひと暮らし 伝承の会

高見和幸さん

日時：2022年10月22日（土）18:30～20:00

会場：アクロスあらかわ

参加費/無料 資料代100円

あらかわひと暮らし 伝承の会

トークでつなぐ 故小沢あや女さんの活動をふりかえる

日時：2022年8月27日（土）14:00～15:30

会場：サンパール荒川第2・3集会所

参加費/無料 資料代100円

あらかわひと暮らし 伝承の会

福田 順子さん

日時：2024年6月11日（土）14:00～15:30

会場：サンパール荒川3階 第4集会所

参加費/無料 資料代100円

あらかわひと暮らし 伝承の会

ワンステップ

日時：2024年4月13日（土）14:00～15:30

会場：サンパール荒川4階 第2・第3集会所

参加費/無料 資料代100円

あらかわひと暮らし 伝承の会

ダンボの会

日時：2024年1月13日（土）14:00～15:30

会場：サンパール荒川 第7集会所

参加費/無料 資料代100円

あらかわひと暮らし 伝承の会

銀の杖

日時：2023年9月30日（日）14:00～15:30

会場：ふるさとつらつぱり3階 多目的スペース

参加費/無料 資料代100円

あらかわひと暮らし 伝承の会

伝えていこう。地域の先人たちの、福祉の足あと

「生きづらさをかかえる人々を支援して」と題し、さる8月に女性の更生保護施設<sup>1</sup> 静修会施設長のお話を聴く会がありました。主催は「あらかわひと暮らし 伝承の会（以下、伝承の会）」。

同会は、荒川区で生活課題に取り組んだ当事者やボランティアなどの話を聴き、それを多くの人と共有して後進に伝え、今後の地域保健福祉を進める一助にすることを目的に発足しました。共同代表と発起人の方々にお話を伺いました。

協議会（以下、社協）の元職員。「荒川には後世に残すべき活動をしている方がたくさんいらっしゃいます。お節介で人が喜ぶことを自分の幸せだと感じる、そんな宝物のような人たちのことを伝えたいという思いがありました」。そして、趣旨に賛同した6人が発起人となりました。

豊富で幅広い 荒川の「蓄積」を伝えたい

伝承の会は、太田貞司さんの呼びかけで始まったそうです。太田さんは、複数の大学で教鞭をとりつつ、保健所のMSW（医療ソーシャルワーカー）や地域福祉活動計画の策定委員長などを務め、荒川区をフィールドに活動されてきました。

地域の良さも感じてほしい

伝承の会はこれまで8回開催されました。「男性介護者の会や、アルコール依存症の回復施設の設定、日雇い労働者の方々の支援は、全国に先駆けて始まった活動。また、個人のお宅を訪問する傾聴活動も当初は珍しかった、と発起人の皆さんは言います。

荒川区は、先駆的で多彩な地域福祉の取り組みが行われてきたと言われる地域。この「蓄積」を引き継ぎ、地域福祉の新たな基盤づくりに生かそうと、太田さんから提案があったそうです。

太田さんとともに共同代表を務める鈴木訪子さんは、荒川区社会福祉

荒川が時代の先駆けになった理由を伺うと、「課題が見えやすい適度なまちの狭さ」、そして「地方出身者が多くて支え合って暮らしてきたので、排除しない風土が醸成されたのでは」という答えが返ってきました。実際に、更生保護施設やアルコール依存症の回復施設をつくる際も大きな反対はなかったそうです。「荒川区には、住民や社協、役所なども一緒に包摂して課題に取り組む力があると思っています。そして、それが



(右ページ) あらかわひと・暮らし 伝承の会のちらし。  
 (右) 第八回伝承の会の様子。(左) 呼びかけ人の太田貞司さん。  
 (中) 取材に応じていただいた、(左手前より) 左田野悦子さん、鈴木訪子さん、  
 浅野芳明さん、(右手前) 与儀恵子さん、撮影は内山順夫さん、他に、武田純子さん、  
 伊熊公一さんが発起人を務めている。写真・画像提供:あらかわひと・暮らし 伝承の会

住みややすさにつながっている。そんな荒川の自慢できるところもお話を通じて感じてほしい」と鈴木さん。  
 参加者は平均40名と各回とも多く、活動は順調のように見えますが、20〜30歳代の参加者は少なく、次世代へのバトンタッチが課題となっています。対策として、広報の拡充や動画配信を検討しているそうです。

### 改めて知る、地域のすゝさ

伝承の会の活動をやってみての感想を聞くと、ポンポンと話が出ます。

「荒川って、名もなき人たちが一つひとつ築き上げてきたすごい地域だと改めて感じました」、「制度がない時代は、障がいのある人たちを近隣の人がサポートしたり、社協職員が泊まりで介助したりしたんです。太田さんも障がいのある人をおぶって階段をのぼったりしてましたよ」、「当事者、ボランティア、保健所、社協などが一緒に制度をつくってきた。それらの人をつなげたのが太田さん。自分たちの世代は、こうした活動を実際に見てきたんですね」  
 エピソードの数々は、本題から脱線しつつも興味深い貴重な話ばかり。「こういう話の中でテーマやゲストが決まっていくんです。今日のように

な気楽な会話を聴きたい人もいるかも。鼎談形式ていだんをやってみようかな」  
 続いて、伝承の会で取ったアンケート回答の一部をご紹介します。「ソーシャルワークの型にこだわりすぎていた。大切なのは『人と人とのつながり』にあることを改めて思い知らされました」、「多くの人に知ってほしいので、録画や文字に起こして提供してほしい」、「昔があったの今、大切にしなければならぬことを伝える場として継続してください」

### 地域福祉の推進をめざして

荒川区には、地区によって新しい人の流入が増えています。引っ越し

てきた子育て世代の人たちが「荒川区は歩いて行けるところに子育てサロンが必ずあるから、とても便利」と言うそうです。それも、新しい人を排除せず、支え合う土壌を先人たちが築いたからではないでしょうか。

かつて荒野を肥やして草花を育てた人たちがいた…土は肥えても新たな課題が発生する環境のなかで、次世代が草花を育てるためには、先人の知恵や工夫に学ぶことも大切でしょう。伝承の会では、そうした過去と未来のつなぎ役をしています。

＊1 更生保護施設…犯罪や非行をした人たちに対して、円滑な社会復帰をするためのさまざまな支援を行う民間の施設。

### 伝承の会(2022~2024年)

- 【第一回】 故 小沢あや女さんゆかりの方々  
(元荒川区心身障害児・者福祉連合会会長)
- 【第二回】 高見和幸さん  
(東京進行性筋萎縮症協会所属、  
荒川区自立支援協議会委員等)
- 【第三回】 荒川男性介護者の会「オヤジの会」
- 【第四回】 中村訓子さん  
(ほしのいえ：山谷地域で活動する団体)
- 【第五回】 銀の杖  
(荒川区認知症の人を支える家族の会)
- 【第六回】 ダンボの会  
(傾聴ボランティアグループ)
- 【第七回】 ワン・ステップ  
(山谷マックデイケアセンター)
- 【第八回】 福田順子さん  
(更生保護法人静修会荒川寮施設長)



# 歴史を見て、 振り返り、 つないでいく

## 南方特別留学生を 語り伝える会

「南方特別留学生を語り伝える会」にて活動する広島市立大学准教授のヌルハイザル・アザム アリフ氏(以下、アザムさん)にお話を伺いました。

### 南方特別留学生って 知っていますか？

「南方特別留学生を語り伝える会」はどのような活動をされているのですか？

情報収集や講演活動のほか、写真や動画などで国内外へ発信しています。遺族の方が来日された時は、原爆資料館や大学、寮の跡地やお墓へ案内しています。また、遺影登録のお手伝いもしています。

「南方特別留学生」はあまり聞きなれない言葉ですが、どんな方々なのでしょう？

1943年と1944年の2回に分けて大東亜共栄圏<sup>1</sup>を担うリーダーを育てるため、占領下の南方地域の優秀な生徒から選抜され日本政府に招聘された留学生205名のことです。

### 南方特別留学生との出会いと ニック・ユソフさん

アザムさんどのように南方特別留学生のことを知ったのですか？

元々、被爆者でマレーシア人のラザク先生<sup>2</sup>の事は知っていました。大学院卒業後、准教授として再来日した時、広島大学マレーシア留学生会から南方特別留学生の一人で被爆死されたニック・ユソフさんの法要に誘われました。そこで偶然、昔お世話になった広島市留学生会館の元職員、久保田良枝さん(南方特別留学生を語り伝える会代表)と再会しました。久保田さんのお母様は広島文理科大学(現広島大学)で働いておられ、留学生と親しかったそうです。墓前で祈りを捧げていると、なぜかユソフさんの声が聞こえたような気がしたのです。その日から次々と縁の深い方々とながるので、自分には伝えていく使命があるのではと思いました。

アザムさんが語り継いでいる方の一人に、ユソフさんがいらっしゃいます。どんな方なのでしょう？

ユソフさんは、1925年にマラ

ヤ(現マレーシア)で生まれました。1941年にイギリスの植民地だったマラヤに日本軍が攻めてきて、全土を占領しました。学校で日本語の授業が始まり、優秀な成績を修めていたユソフさんは南方特別留学生として日本に行くこととなりました。1943年に第1期生として約100名の留学生が東京に来日。そのうち20名が広島の学校に入学し、翌年、更にそのうちの5名が広島文理科大学に進学しました。みんな興南寮という寮で生活していて、寂しい時は故郷の歌をみんなで歌っていたそうです。次第に戦争が激しくなり、日本の学生が次々に戦地に送り込まれる中、ユソフさんから南方特別留学生は授業を受けることができたため、一所懸命勉強していました。そして1945年8月6日に原爆が投下され、木造2階建ての興南寮はぺしゃんこに押しつぶされました。ユソフさんは、興南寮の状況を報告しに大学に向かい、その後、火事の火から逃げ、郊外に避難しました。その翌日に亡くなったようです。現在、広島の日田市にある光禅寺<sup>3</sup>というお寺のお墓に眠っています。

当時、広島にいた南方特別留学生は9名で、そのうち8名が原爆投下時に広島にいました。原爆投下後、



＊私だからできる懸け橋に＊

私の妻がマレーシアの高校に勤めていて歴史を教えています。マレーシアの教科書では原爆投下の事実だけが記載されているため、開戦から終戦に至る経緯や原爆投下後の広島や長崎の状況も伝えるようにしています。8月31日の独立記念日には学校でクイズ大会を行い、優勝者にこの絵本をプレゼントしました。優勝した生徒も、作者の青木圭さんも大変喜んでくれ、日本とマレーシアの懸け橋になれたようで、感動しました。(アザム)



(左) ユソフさんの遺族はお墓のほか、ユソフさんが住んでいた興南寮跡地を訪れた。碑には、「南方特別留学生」の文字が刻まれている。  
(右ページ) ユソフさんの法要。栗原明子さんの著書『明子 被爆者である母のこと—南方特別留学生との友情—』をお墓に添えて。写真提供：ヌルハイザル・アザム アリフ

南方特別留学生と一緒に野宿した栗原明子さん(98歳)を、来日したラザク先生の息子家族が訪ねた際、当時みんなで歌っていた歌を一緒に歌う様子を見て感動し、心が温かくなりました。

教科書に載らない  
人間関係のことを伝える

— 伝えること、継承していくことの意味はどんなところにあると考えていますか？

ます。日本の人たちには、被爆者が日本人だけではないことを知ってほしいし、マレーシアの人たちには、知らない歴史があることを知ってほしい。いつか資料館や博物館に載せてもらえたら嬉しいです。

歴史を見て、振り返って、つないでいく。伝えることで臨場感が生まれ、シンパシーやエンパシーが生まれていくと思っています。世界中でも今も悲惨な戦争が起きていますが、人間は変わらないように思います。だからこそ同じことを繰り返さぬよう悲慘さを伝えて、同時に人の温かさ、絆、人となりを伝える。人間は違いよりも共通点を見つける方が関心を持ちます。教科書には載らない人間関係のことも伝えることで、平和な世界を実現していけるのではないかと思います。知らないということ、は、真実を追求するきっかけになります。まずは知ってほしい。知らない歴史を知ってもらいたいことだと思います。



ヌルハイザル・アザムアリフ  
マレーシア出身。1973年生まれ。広島市立大学の准教授。国際ビジネス専門。国内外で南方特別留学生被爆者について語り継ぐ活動をしている。

— 様々な方々のつながりや取り組みによって紡ぎだされる縁に、感動したと何度も伝えてくれるアザムさん。人とのつながり、相手を思う優しさがきつと平和な世界を実現する第一歩なのだ、お話を伺いながら思いました。

- \*1 太平洋戦争下、アジア進出を正当化する目的で日本が唱えたスローガン。
- \*2 アブドゥル・ラザク氏。マレーシア人で生き残った唯一の被爆者。南方特別留学生に選抜され、来日し、広島文理科大学に入学。授業中に被爆。帰国後、日本語教育者として日本とマレーシアの懸け橋として活躍

# 地域で女性の歩みを記録する

やまざき  
山崎雅子（練馬女性史を拓く会、立教大学兼任講師）



高度成長期下の急激な人口流入により都市近郊の農村地域からベッドタウンへと変貌を遂げた東京都練馬区では、1960年代の後半から、区政の停滞や都市整備の遅れにともない噴出した諸問題を前に、解決を求める運動が住民の間から湧き上がった。こうした動きのなかでさまざまな女性グループとその活動を結びつけながら力強い働きをみせたのが、「練馬母親連絡会」である。私たち「練馬女性史を拓く会」は、この練馬母親連絡会とそこに集った女性たちを研究対象とし、練馬という地に生き活動した女性たちの足跡を記録し未来に伝えるという、地域の記憶の記録化と継承に取り組んでいる。

## 半世紀近く続いた、地域の女性たちによる学習と問題解決の取り組み

練馬母親連絡会（以下、母親連絡会）は、第三回日本母親大会の練馬での報告会開催をきっかけに1957年秋に発足し、その後半世紀近くにわたって、練馬で活動する女性団体や個人を緩やかにつなぎ、それらの交流・学習・行動を実現させ、生活や政治や社会にかかわる諸問題の解決に取り組んだ運動体である。毎月の

例会での情報交換や協力要請、議論、他団体との連絡調整といった活動はもとより、グループや個人が問題や相談を持ち込んでそれを学習や議論につなげ個々の問題解決の行動や住民運動へと発展させる拠点ともなっており、女性たちの運動のセンター的機能を発揮した。ここでの共に考え協力して問題に取り組むという体験を通して、女性たちは自己の社会的責任を認め、家庭内や妻・母親役割にとどまることなく、学習で得た力を生活や地域のさまざまな場面に生かし、行動する市民へと成長していった。

一方、練馬女性史を拓く会（以下、拓く会）は、練馬区の社会教育講座から派生し結成27年を数える自主学習グループである。母親連絡会の実践と女性たちの成長の軌跡に着目し、関係者への聞き取りや調査・研究を重ね、その成果を『始まりはひとりから―練馬の女性たちの記録』（聞き書き編3冊、テーマ別の総論編5冊、自費出版）にまとめた。会の名前にある女性史とは、女性という視点から既成事実や男性中心の歴史観を問い返していく試みだが、私たちもまた、自治体等の「正史」では見落とされがちな市井の女性たちに焦点を置き、その市民的活動を記録



(上) 練馬母親連絡会の通信『豆ニュース』。1976年3月から2000年3月の第264号まで、毎月1回発行された。活動報告、呼びかけ、情報などの記事からなり、時々問題に取り組む女性たちの姿が生き生きと記録されている。

(右ページ) 練馬女性史を拓く会が発行した冊子、『始まりはひとりから—練馬の女性たちの記録』。聞き書き編3冊、テーマ別の総論編5冊。

(同) 練馬女性史を拓く会(2012年7月23日)。第10回女性史研究東京連絡会の会場打ち合わせにみえた折井美耶子さん(女性史研究家・前列右から2人目)を囲んで。

写真・画像提供：練馬女性史を拓く会

＊ 関連文献 ＊

川崎俊子「地域女性史シリーズ② 始まりはひとりから—練馬の住民運動を担った母親たち—」『月刊社会教育』2014年2月号。

山崎雅子「市民運動を記録する営み—記憶(運動経験)を継承する—」『社会文化研究』第18号、2016年。

練馬女性史を拓く会

(代表 小沼穂子)

i.konuma@jcom.home.ne.jp

し可視化することで、地域社会の成り立ちを住民・生活者サイドからとらえ直すという観点を提示してきたといえるだろう。

身近な疑問と、連帯と、行動が、確実に地域社会を変えてきた

母親連絡会の女性たちの軌跡から読み取れるのは、どんな小さな疑問や問題も見過ごさずに声をあげ行動することの大切さと、そうした率直な思いと強い意志が力と連帯を生み出し、社会を変えるきっかけをつくっていくという事実である。教育、文化、消費者、福祉、環境、都市計

画、平和、女性問題など、彼女たちが取り組んだ課題は多岐にわたる。誰もが尊重され幸せに生きられる平和な社会を目指した彼女たちの模索と努力の先に今の地域があり、活動のなかで蒔かれ芽吹いたものが今も地域のさまざまな場面や人びとの行動に実り息づいていることを忘れたくはない。そしていつか彼女たちの思いや活動を知りそれに学んだ者によって、その精神や経験が引き継がれ新たな形で花開いていくかもしれない。拓く会の記録化の作業は、そうした地域の記憶を人びとに届け、次の世代に受け渡していく、過去から未来への橋渡しの役割を担ってい

先駆的な取り組みの生の記録を、未来の世代へ

母親連絡会が残した資料は、現在、立教大学共生社会研究センターで保管・公開され、それらを活用した研究がさまざまな領域でさまざまな角度から行われている。今後さらに資料活用や研究の進展が予想されるなか、拓く会が積み重ねてきたものも先駆的な調査資料として参照される機会が増えていくだろう。特に母親連絡会の当事者からの聞き取りは、同じ地域に生きる先行者とそれに続く者という関係性にある拓く会だからこそなし得た仕事であ

り、その記録は女性たちの生の声を後世に残し伝える貴重な資料となるだろう。

この点を重くみて、拓く会の私たちは今、前述の冊子(『始まりはひとりから—練馬の女性たちの記録』)の聞き書き編を再編集し出版すべく準備を進めている。より多くの人に母親連絡会と女性たちの活動を知ってもらえるよう、これまでのような簡易な形ではなく、正規の流通ルートに乗せられる書籍にして世に送り出したいと考えている。共に学び励み合いながらも書籍化を見ずして旅立った会のメンバーに報いるためにも、私たちの前を歩き市民としての生き方を示してくれた母親連絡会の女性たちと、これから母親連絡会と出会うことになる人たちをつなぐためにも、ぜひとも実現させたい。

# 記憶をめぐる ア・ラ・カルト



記憶を継承し、紡ぎ、残していく方法はさまざま。  
あなたの身近な場所や、慣れ親しんだものも実は、...。  
ぜひ秋の日々に、散歩や思い出にふけるのはいかがですか？  
誰もが様々な方法で記憶を継承することもできるし、  
記録を残していくことができます。  
そんな取り組みをいくつか紹介します。

## ◎国立歴史民俗博物館◎

博物館や美術館に最近行ったのはいつ頃？月の石から美術品まで、よく考えてみると、そこに所蔵されているものは過去から後世の私たちに大切に継承されてきたものともいえる。

今、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館では、企画展示「歴史の未来―過去を伝えるひと・もの・データ―」が12月8日まで開催されてい

る。古代以降の古文書から2020年以降の新型コロナの関連記録まで歴史が記録として紡がれていく営みを考える展示や、歴史資料のデジタル化の取り組みを体験できる。私たちが生きる現在もいずれ過去となるのを実感し、私たちが100年後に伝えたいものは何かを考えられる企画展示だ。

さらに、市民参加型企画として

「100年後に残したいものをアークイブしよう」も11月8日まで開催。今思う100年後に残したいものを撮影し、専用アプリ「foward」を通じて投稿するだけで参加できる。市民ひとりひとりが過去を保存し歴史の未来を創り上げていくこの取り組みに参加することで、記憶の継承の一端を誰しもが体験し実感することができる。

企画展示

# 歴史の未来

過去を伝えるひと・もの・データ

あなたが100年後に残したいものは何ですか？

2024  
10.8 ▶ 12.8

【会場】国立歴史民俗博物館 企画展示室 A・B  
【開催時間】9:30～16:30 (入館は16:00まで)  
【休館日】月曜日(休日にあたる場合は開館し、翌日休館)  
【入館料】一般1,000円(800円)/大学生500円(400円)  
※1: 内容は20名以上の団体料金。  
※観覧は以下要予約。  
※総合展示-C&Sの観覧もご覧いただけます。

国立歴史民俗博物館  
National Museum of Japanese History

〒289-0902 千葉県佐倉市南町117  
TEL: 0476-32  
FAX: 0476-32 歴史民俗資料館(土曜日は休館) 民俗資料館(土曜日は休館)  
TEL: 0476-32 民俗資料館(土曜日は休館) 民俗資料館(土曜日は休館)  
TEL: 0476-32 民俗資料館(土曜日は休館) 民俗資料館(土曜日は休館)  
TEL: 0476-32 民俗資料館(土曜日は休館) 民俗資料館(土曜日は休館)  
TEL: 0476-32 民俗資料館(土曜日は休館) 民俗資料館(土曜日は休館)



## ◎校歌から知る地域◎



手掛けた校歌集と校歌CD

小学校や中学校で全校生徒が歌えるものといえば、「校歌」。その多くは学校が創立した時から歌い継がれている。そしてその校歌は、設立当時の時代や地域の特徴等を歌詞として紡ぎ、それぞれの学校の個性として児童生徒徒を見守り続ける。だが、平成から現在にいたるまで、数多くの学校が失われ、大都心千代田区でも歴史ある区立小中学校の数が多くが消えていった。

かつて千代田区立小学校に通った直野桂英<sup>あつひ</sup>さんは、失われてしまった学校はどんな学校だったのかを知りたいと思い、校歌を集め、さらにそれを校歌集としてまとめることで後世に残そうとしている。校歌を知ることが、区の文化や歴史を学ぶことになるし、校歌集を地域とその地域で学ぶ子どもたちの架け橋として地域学習にも活かしてほしいと願う。校歌の歌詞だけではなく、楽譜、特に前奏や伴奏のついた伴奏譜を集めて、かつての校歌の演奏を再現できるように奮闘中だ。

## ◎デジタルアーカイブ◎



戦争や災害など、昔のできごとや遠くの地で起きたできごとをより身近に感じるには？デジタル技術を駆使して、例えば残されていたモノクロ写真をカラー写真化してみる。できごとをデジタルな地球上にマッピングしてみる。遠い昔のように思えたり、身近に感じられないようなできごとが、今の自分が生きる世界に少し近づいたように思える。そんな取り組みは、「デジタルアーカイブ」とも呼ばれ、これを実践・研究しているのが渡邊英徳教授(東京大学大学院)だ。

モノクロ写真をAIで自動色付けし、それを戦争体験者との対話や当時の資料、さらにはSNSのコメントを参考にして作業で色補正。この過程は、できごとについての記憶が人々の心のなかでよみがえり対話の場が生まれるきっかけになる。写真や映像、記録など多元的なデータを1つのデジタルな地球にまとめていくと、できごとの全体像を実感とともに伝えられる。体験者と市民が参画するアーカイブ構築で過去の記憶を社会全体で共有し、未来に向けてストーリーを紡ぎ、過去の記憶を未来に継承していく。

# 記憶をつなぐ人びとの営みによせて

平野泉（立教大学共生社会研究センター・アーキビスト）

## 活動の記録を保存する市民たち

1980年6月。埼玉県の西部に、学校給食にまつわる様々な問題について継続的に協議する場として「埼玉西部地区学校給食を考える会」が生まれました。個人でも団体でも参加できるこの会は、学校給食の問題

に関心をもつ人びとの地域を超えたつながりをつくり、調査や勉強会、自治体への要請などの多彩な活動を展開します。1986年には「西部地区」をとって「埼玉学校給食を考える会」に名称変更し、合成洗剤や食品添加物、農薬など、食の安全性にかかわる問題に精力的に取り組みました。

2021年11月。会のメンバーからのお申し出により、会の活動の貴重な記録を、私の勤務先である立教大学共生社会研究センター（以下「センター」）が受贈しました。段ボール1箱分ほどの様々な記録は、メン

バーの手でいいいに整理されており、センターでの作業はほとんど不要な状態でした。会として活動する中で、メンバー同士の情報共有のために、学びのために、そして行政と渡り合うために作成された記録からは、会の活動の息づかいやぬくもりのようなものが伝わってきます。

このように活動の副産物として生まれ、活動の継続のために保存・利用される記録のまとまりを「アーカイブズ」と呼びます。センターは、市民の様々な活動が生み出すアーカイブズを収集・保存・公開する機関です。だいたいにおいて活動が終わるころに「さて、この資料の山をどうしたものか？」という悩みが生じるわけですが、センターはそんなときの受け皿として役立つ機関といっただよいでしょう。

こうした記録は、活動中はあくまで活動に役立てるべく保存されているのですが、時がたてば異なる意味

を帯びることになります。例えば、静岡県富士市で公害とたたかった甲田寿彦さんの「私はやがて市民の手で市民運動の理論が書かれる時が来ると思っている。また書かれなくてはならない」という言葉のとおり、活動を理論化したり、歴史の対象として客観的に評価したりするときに役立つ素材になるわけです。

## 自らの歴史を自らの声で

人間が継続的に活動すれば、必ず一定量の記録が蓄積することになります。その中には歴史的価値を有するものもあれば、そうでもないものもあり、そうでないものはだいたい処分されてしまいます。長い間、歴史的価値の天秤は、権力や名声やお金のある人・組織に傾きがちでした

が、19世紀の後半以降、立場の弱い人びと、記録を残しにくい人びとへの関心が次第に高まっています。

欧米を中心に、労働者や女性の記録を収集・保存する機関が設立されたのもそのころでした。20世紀半ばからは、少数者や移民など、社会の中で声を上げにくい人びとが自らの記録を収集・保存・公開する営みも活発化します。例えば1970年代半ば、ニューヨークに「レズビアン・ハーストリー・アーカイブズ」(Lesbian Herstory Archives)が生まれました。レズビアンの歴史をつむぐ記録の収集・保存をはじめ様々な活動に取り組み、現在もレズビアン・コミュニティの重要な結節点となっています。

自分たちの歴史、自分たちの物語を、自分たちの声で語ることに。それは抑圧された人びとが力を取り戻す大切な契機となります。その場合、伝統的なアーカイブズ（＝書かれたもの重視）にはおさまらない、聞き取りや写真・動画、コミュニティ内部の小さなメディア、様々なモノや



(右)「埼玉学校給食を考える会」資料  
(左上)共生社会研究センター書庫の様子  
(左下)問いかけつつ読めば、記録はこたえてくれる



マンガや音楽など、どんなものも資料になりえますし、記録がなければ「つくる」必要もあるでしょう。

### 記録する営みが もたらすものとは

もちろん、すべての人の物語を残すことはできませんし、すべてを語りつくる人もいません。どんなに努力しても、記録から忘れてしまう

ことのほうが、つねに、圧倒的に多いのです。しかし、40年前から地元で地道な活動をしてきた人にお話をうかがうとき、70年代に公害問題に取り組んで苦労した人の記録を読むとき、私たちは他者の人生にそっとふれることになりました。それこそが、大切なのではないでしょうか。私もセンターで仕事をするなかで、記録を通じてではありませんが、同じ社会に生きた様々な人の思いや言葉にふ

れて、自分が変わったと感じます。語りつくすことも、知りつくすこともできない人生の奥行きに意識が向かうようになり、町ですれちがうどの人もかけがえのない生を生き、て、家族の記憶や地域の歴史を身にまといつつ暮らしていることが実感できるようになったのです。

人びとの記憶を記録に刻み、地域の知られざる歴史を掘り起こす活動には、たんに記憶を継承し、社会のなかで記憶されることの総量を増やす以上の意味があります。他者の過去に敬意とおそれをもって近づき、知りえたことを自らの言葉で語りなおそうとする人は、人間の尊厳を深いところで感じるようになるはずだとすれば、人びとの記憶をつなぐ活動は、人びとが尊敬し合い、信頼し合える社会を支える人々市民をつくる重要な役割を果たしているのではないのでしょうか。



平野 泉（ひらの・いずみ）

1990年代後半、埼玉大学経済学部社会動態資料センターでのアルバイトを通して、住民・市民運動が生み出す資料のおもしろさを知る。学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻でアーカイブズのイロハを学び、2010年からは立教大学共生社会研究センターで、資料と人をつなぐ仕事をしている。



立教大学  
共生社会研究センター



# セルフヘルプ という力③7

セルフヘルプグループとは、共通の悩み、問題を抱える人やその家族が自発的に活動を行う集まりのことです。このコーナーでは、セルフヘルプグループの思いや活動内容を紹介し、社会の認識を深めたり、他のグループの運営のヒントとなることをめざします。

## 障害のあるすべての女性の 権利擁護を考える

### DPI 女性障害者ネットワーク

障害のある女性当事者の会として活動する「DPI 女性障害者ネットワーク」の、佐々木貞子さんにお話をうかがいました。

● ● ●  
DPI 女性障害者ネットワーク（以下、女性ネット）は、DPI 日本会議\*1の女性メンバーが中心となりスタートしました。DPI 日本会議が発足した1986年とほぼ同じ時期に誕生した任意団体です。男性中心の障害者運動の中で女性に特化した活動をしています。

障害のある女性は、障害者差別と女性差別を重複して受けている状況があります。それを複合差別\*2もしくは交差差別と呼んでいます。「障害者×性差別」障害のある女性の複合差別」です。問題が複雑で、わかりにくいいため、可視化されにくく、障害女性自身も、自分のその生きにくさに気づきにくいのです。

#### ● 人生のターニングポイント

私は、進行性の眼疾患を持っています。視野狭窄が進み、17歳で片眼が見えなくなり、25歳の頃は両眼ともほとんど見えなくなっていました。普通高校卒業後は、経済的自立のために盲学校（視覚特別支援学校）

に通って、三療と呼ばれる、あん摩・鍼・灸を学び資格を取りました。病院に3年ほど勤めた後、結婚しました。

私が地域で子育てをしていて、強く感じたことは、障害がある人の暮らしを知らないことから来る偏見でした。子どもと歩いていると、「小さな子どもが目が見えないお母さんの手を引いている！かわいそう」「きつとお母さん、何もできないんだ」というイメージを持たれてしまったようです。「障害者は何もできない」という障害者差別と、「子育ては母親がするべき、できない人は価値がない」といった性差別が重なった複合差別です。

当時の私はこの問題をちゃんと整理し自覚していたわけではありませんが、違和感や矛盾をすごく感じていました。

親しくなった友達とは私との会話の中で、ちょっと遠慮気味にはあっても、「ご飯はどうしているの？」などと直接聞いてくれます。

「お米を洗う時はザルを使って、米粒が流れないようにしているのよ」とか、「炒めものをする時はフライパンを熱くして、油をポトッと垂らして、グルッと回して、残りは

オイルポットに入れて…」といったように説明ができます。そうすると、「ああ、割と普通なんだ」と理解してくれれます。直接のコミュニケーションが大切なのです。

出産直後に引越したので、地域の様子がわかりませんでした。子どもの急病や外遊びの付き添いは、とても困りました。そんな話を、お母さん友達に話したら、「じゃあ、そういうことがあったら声かけて。都合が合えば病院に一緒にいこうよ」と言ってくれたり「公園で砂遊びさせてあげましょうか」と知り合った方が、また他のお母さんの友達に声をかけてくださったりして、地域の友達からとてもよい支援、いわゆるボランティアな支えをいただきました。

反対に偏見を持つのは、遠巻きにしている方々です。日常的なつながりがなく、外で子どもの手を引いている姿しか見ていないので、いわゆる奇異な視線や態度をされ、とてもきつかったです。興味はあっても、私と知り合いではないと、直接、聞こうとしません。でも、私と一緒にいない時に娘に聞くんです。「お母さんってかわいそうよね、ご飯は誰が作ってるの？」と。それを子ども





メンバー揃っての集合写真。東京ボランティア・市民活動センター会議室にて。



女性差別撤廃委員会(2016年)。

はすぐには言いません。後になって、ポツッとこんなことを言われたと聞いて、「えー」と、私はまた傷ついてしまいます。

夫はサラリーマンで、朝早くから夜遅くまで仕事です。家の中では一人で必死に子育てや家事をしていても、外目には分からないのです。一歩外に出れば、私は何もできない、みじめなお母さんと思なされるのが嫌で、「目の見えるお母さん」にも引けを取らないんだからと、つっぱって子育てをしていたのです。保育所の連絡帳の記入とか、子どもの服の上下が色的にあっているとか、今思うと細かいことに神経をすり減らしていました。夫は、そんなことまで気にしなくていいんじゃないかと言っていました。現実はその割り切れることではなく…。ただ、そういう自分にとっても行き詰まりを感じていました。

ある時、「子どもの世話や家事にこだわっているけれど、では、病气や障害で物理的に子どもの世話が難しいお母さんを、私はどう考えるのだろう?」と、自分に問いかけました。「私はできるわ」って主張することは、努力しても、工夫しても物理的に難しいお母さんを否定して

んじゃないかと…。さらに、「お母さんは子どもの世話をすべき」という、世の中の価値観に縛られているのではと思いました。

そんな時、女性ネットの合宿があり、初めて肢体不自由の車いすユーザーの女性たちに会って、女性ネットの活動にふれました。次の合宿に参加した時に、全身性の障害のあるお母さんが、ご家族と介助者と一緒に来られました。発話できない彼女は文字盤をわずかに動く指で示し、それを介助の方が読み上げるという方法でコミュニケーションを取っていました。すごく聡明な方で、伝える言葉は多くありませんが、その内容はとても簡略ですが的確でした。また、介助者を通じてご主人やお嬢さんへ身の回りの心配りをするなど、身体は動かなくても、彼女は素敵な母親でした。「母親は何ができるできないではない」と確信し、目からうろこの思いでした。

子どもは、多くの人間関係の中で育まれるもの。母親一人で頑張る「密室育児」は避けるべきと痛感しました。女性ネットの活動への参加が価値観を変え、その後の生き方を定めた、一番の出会いであり、ターニングポイントでした。

● 合言葉は「私たち抜きに私たちのことを決めないで」

1970年代にアメリカで障害者の自立生活運動がスタートして、日本の障害者運動も刺激を受け、日常生活介助や地域で暮らすための知識や経験を伝えるピアサポートを行う組織ができました。その考え方は「なんでも自分でできるのが自立ではない」ということです。障害のある人もない人も24時間は同じ。一時間かけて苦勞して着替えをするよりも、介助者のサポートを得て数分で着替え、障害のない人と同様に学習や仕事、趣味などの社会活動を行い、人間として自分らしい暮らしを送ることが、本当の人生ではないかという考え方です。

人生は選択と決定です。自分で選べ、自分で決めていく。決定に対して、自分で責任を持つ。ある意味、人として当たり前のことです。でも、一般的には当然のことなのですが、障害があると、周囲の人、家族や医療・福祉関係者が失敗のないように、大変なことにならないように、事前に保護するという考え方が強いのです。

でも、本人は保護を望んでいると



写真提供：  
DPI女性障害者  
ネットワーク

報告書「障害のある女性の困難～  
複合差別実態調査とその後10年  
の活動から～」。

DPI女性障害者ネットワーク新実態調査報告書完成報告会in京都(2014年3月)。

は限りません。自立生活運動は「失敗できる権利」を主張します。何から何まで周囲がお膳立てしていったら、その障害のある人は、何が失敗で、どう工夫したらよいのか、失敗から学ぶことすらできません。言い換えれば、それまでは家族や周囲の人たち、専門家が障害のある人の暮らしを決め、本人の主体性を抜きに考えてサポートしていたことが多かったように思います。私たちの気持ちの中には「私たち抜きに私たちのことを決めないで」という理念があります。それはDPI日本会議の合言葉でもあります。

私たちは社会の一員として、主張すべきところは主張しますが、社会全体を考えた根拠あるミッションと提案が必要と考えています。障害のある人もない人もインクルーシブさ、人権を尊重される社会を実現することが求められます。

障害者だけではなく、性の多様性を持つ方、いろいろな民族的な背景を持つ方、他にもいろいろな状況にある方もおられるでしょう。さまざまな多様性を受け入れるという社会が結局、すべての人が生きやすい社会ではないかと思いい活動しています。

**● 男性中心の障害者運動を  
変えるために**

ある脳性麻痺のご夫婦のお話ですが、「僕は障害者運動で、障害者が住みやすい社会を創るんだ、だから君は家を守ってくれ」と言ったそうです。今までの社会は男は外、女は家、男性は経済を担い、女性は家事とかケアとか、当たり前前に内面化させられてきたと思います。それは障害者の中でも同じなのです。女性は活動をしにくい環境にあります、声を出さないと、知らず知らず男性優位の考え方になっていくことに、男性自身は気づきにくくなるのではないのでしょうか。

盲学校の恩師と以前お会いした時のことです。「視覚障害女性の三療業は性被害のリスクがありますよね」と言った時、「でもなあ、仕事があるだけいいだろう」と。仕事があるだけいいというのは、障害男性の感覚だと思えます。

障害男性も仕事をして、稼いで経済的に自立することがまず求められています。でも障害女性にとって、経済的に自立できても、危ないことと裏腹だったら、それは嫌でしょう。この発想はやっぱり、男性の障害者

運動と女性の視点から見た障害者運動との違いではないでしょうか。三療業の性被害が表面化しにくいのは、被害を受けたことを公にしては三療業が世間からラベリングされ、差別や偏見を助長するという危惧があるのかもしれない。

男性と女性の視点の違いを女性が主張していかなければならないです、障害女性自身が自分の複合差別を自覚して力をつけていく、障害者運動にも影響を与えていく必要があると思います。障害者運動の方法論は、それぞれの団体なり個人なりで考え方が違いますし、どうやって社会を捉えるかで運動の方向も変わっていきます。でも、人権を尊重し、より良い社会をつくらうという同じ価値観を持つ人同士だったら、共感できるというのか、お互いの主張を出し合いながら、建設的対話を重ね、分かり合えるのではないのでしょうか。

さて、1990年代初頭、私が活動に関わったところは、優生保護法\*3の問題が社会的に注目されることはあまりありませんでした。施設で生理解助の時間を省くためと、自ら希望して子宮摘出手術を受けた方がいます。それは自発的というより、施

設の人員不足や、不十分なケアによるものなのです。排泄や入浴のケアは職員への気兼ねが多く、辛いことなのです。

その方は、自分の手術の後、同じ施設の何人かの肢体不自由女性が同じ手術を受け、「自分がきっかけで他の人まで手術をすることになった。すごく悔やんだし、悔しかった」と話していました。彼女が受けた不妊手術は優生保護法でさえ認めていなかったものでしたが、以前は、このようなことがまかり通っていたことを多くの人々はほとんど知らされていなかったと思います。

女性ネットの当初の目的は優生保護法撤廃でした。その後母体保護法に改正されましたが（1996年改正）、最初の国家賠償訴訟が提起され、注目を集めるようになったのは、2018年のことでした。

現在、ようやく、最高裁で違憲判決が出て、国も謝罪して、すごい変化です。原告の優生手術\*4被害者が粘り強く、泣き寝入りしないで、行政に働きかけ、周りを巻き込んで、支援の輪が広がった結果です。

国連女性差別撤廃委員会から出された「優生手術の加害者を罰するべき」という強い勧告も弾みになり、

この旧優生保護法の問題は、裁判を経て、一定の解決にまで至ったのです。女性ネットも他の団体と一緒にジュネーブへ行き、ロビー活動をして、勧告を引き出すことができました。

### ● 社会に伝えたいこと

人間は病気もケガもします。当然ながら、年をとったら、病気になるし、障害ももちます。障害は特別なことではないのです。確かに障害をもつと不便なことはあります。それは今までの社会が、障害のない人中心につくられてきたためということが多いのです。変えることができますし、今あることが全てではありません。

人はどんな状況でも、障害があってもなくても、よりよく生きようとする力、エンパワメントを持っています。しかし、パワーレスになってしまうこともあります。環境や周囲の支援によって、エンパワメントが引き出されることもあります。

障害のある人となない人が出会う時、戸惑いや摩擦もあるでしょう。そんな時も、お互いに遠慮しあわずに、建設的に対話することが大事です。腫れ物にさわるようにではなく、一歩踏み出してみることが必要だと

思います。

たとえば、街で迷っている視覚障害者と出会った時、躊躇もあるかもしれないですが、困っている様子だったら、声をかけてほしいです。「結構です」と拒否されても、がっかりしないで、その時は、その人は助けが必要なかったと確認できたと思っしてほしいのです。身近なことから、関わったり、考えてもらうのがよいのではないかと思います。

インタビュー…安井忍（相談担当）  
朝比奈ゆり（編集部）

\*1 DPI Disabod Peoples International の略で訳は障害者インターナショナル。

\*2 複合差別 性、国籍、人種、民族、障害の有無など複数のアイデンティティに由来する差別が、複雑にからみあって、より深刻なものになる状態。

\*3 優生保護法 1948年に制定された1996年まで施行。「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康保護を目的とする」もので、遺伝性の疾患や障害がある人に対し本人の同意がなくても強制的に不妊手術を行うことも認めていた。

\*4 優生手術 旧優生保護法では「生殖腺を除去することなしに、生殖を不能にする手術で命令をもって定めるもの」と定義された。

## DPI 女性障害者ネットワーク

障害による差別と性による差別を受ける複合差別を被る、障害のある女性。その当事者として、障害女性の困難を解消するため、施策提言や啓発活動を行うセルフヘルプグループです。

**キーワード** 障害のある女性、性差別、複合差別、ジェンダー、エンパワメント、インクルーシブ社会

**運営メンバー** 障害種別やライフスタイルが多様な障害女性

**活動内容** 調査・報告書作成、講演、政策提言、ロビー活動

**参加できる人** 障害のある女性と、障害のある女性の複合差別解消に関心のある方々

**活動エリア** 国内および海外 **相談** なし **集まれる場** なし

**連絡先** dpiwomen@gmail.com

**Webサイト** <https://dwnj.chobi.net/>

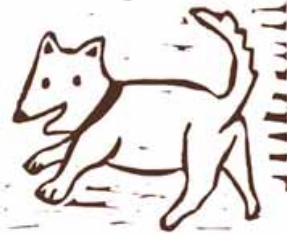


HP



スタッフAの

# 町内会物語



## 【3】『令和の改新』始まる!?

当センターのスタッフAが、突如、町内会の役員になり、地域のことをディスカバーする全3回の連載です。

わが町内会の会長さんは92歳。歩行器を使って歩くのも大変そうだし、夜の会議の参加も心配なので、総務部長のTさんが「私が会長を代わりますよ」と伝えたところ、「いや、私は生きている間は会長でいたい」とのこと。そこで、「名誉会長」という役職を作り、残っていただくことになった。実質的な会長はTさんだ。とはいえ、Tさんも今年80歳になるらしい。「任期は2年間」と宣言した。

そして、もう1人の女性役員で、私をこの役員会に誘ったワンコ友だちのPさんが総務部長になってくれて、私は彼女を実務で支える副部長にとどまった。Pさんは数年前に退職しているが、とても社交的で、お母様の介護もあり、お忙しいうだ。でも、「町内会を楽しくしたい!」という思いがある。なんて、素晴らしい。

そのPさんは地域でとても顔が広いので、子ども会の代表を5期務めたというSさんも役員会に誘った。50代?かな。たくさんのお子さんを育て、40代でお孫さんが誕生し、現在もフルタイムで働いている。でも、快諾してくれたという。彼女は会計部長になってくれることに。なんて、素晴らしい。

そこで、さっそく、現総務部長で次期会長になるTさんの家にこの3人の女性役員が集まり、スイーツとコーヒーを優雅にいただきながら、引き継ぎを受けた。そこでわかったのは、総務部長のTさんがほぼ全ての仕事を担っていたということ。感謝と申し訳なさで涙が出そうになった。これからは私たちが会長を支えます!

そして、6月の総会に町内会の人にも来てもらうための作戦会議。最近、地震や水害が多いので、災害時の非常食の試食会を総会の後の交流会でやろうということになった。総会の案内文も柔らかい感じで私が作成することに。

昨年度から、この中学校区の町内会役員が集まり、避難所の運営なども話し合っているらしい。他の町内会の役員もシニアの男性ばかりらしいが、はりきっているという。町内会は安全・安心の町づくりと親睦が大きな役割だと会則に書いてあった。

Pさんからは集会所の建物と庭を使ってフリーマーケットをして、その収益を能登半島に寄付しよう!という提案もあり、Sさんも私も「やろう!やろう!」と盛り上がった。

いろいろ変えようとしても、反対派や無関心な人たちはいるだろう。しなやかに、少しずつ進めていきましょう!安全で楽しい地域社会のために。

完



本誌バックナンバー



イラスト：ひびのさなこ

# 一人ひとりが 自分らしくあるために



『Shrink ~精神科医ヨワイ~』  
©七海仁・月子／集英社

NHKで『Shrink』精神科医ヨワイ〜へ全3回Vがドラマ化された。第一話を見終え、原作漫画を読み始めたところだ。ドラマでは、新宿の小さな精神科クリニックの精神科医、弱井役を中村倫也さん、看護師の兩宮役を土屋太鳳さんが演じている。

日本の精神疾患の患者数は12人に1人。アメリカでは4人に1人。一見、後者の方が患者数がとても多いように思うが、日本の自殺率は世界6位。アメリカは20位と日本の自殺率の方が高い。同国では、ちよつと落ち込んだことがあったときに予約を入れて会うくらいに、精神科が身近だという。アメリカでは、精神科医を「Shrink（シュリンク…和訳で「縮む」）

と呼ぶそうだ。妄想で大きくなった患者の脳を小さくするという意味だ。

第一話は「パニック症」。パニック症は、自律神経の交感神経が過剰に働き、動悸、頻脈、息苦しさを起こす。逃げられないと感じる場所に行けなくなる「広場恐怖」また発作がおきるのではないかと不安になってしまう「予期不安」の症状についてもふれている。

私は、一年半前に朝の満員電車の中で急に血の気がひいて目の前が真っ暗になった。力が入らず、息が苦しく声も出ない。救急搬送されたが血液検査では特に異常はなかった。しかし、それ以来、満員電車を見ると心臓がバクバクして、呼吸が苦しくなって乗り込めなくなつた。気づけば、会計待ちの長い列や、美容室、歯医者にも行けなくなつた。「広場恐怖」の症状だ。

パニック症は脳の誤作動だそう。心が弱いからではない。ドラマでは、患者が自分で不安階層表\*を作つてベイベーステップという方法で練習し、「少しずつできることから」と医者が声をかけていた。私の前職は営業職で、電

車や飛行機で日本全国を飛び回っていた。電車に乗ることが怖くなる日など全く想像していなかった。パニック発作では死なないとわかっていても、脳の誤作動は思うように止められない。しかし、以前のようにまたどこにでも不安を感じることもなく出かけられるようになった。そのため一歩進んで二歩下がることもありつつ、日々練習を続けている。

精神疾患は以前より少しずつ社会に認識されてきているのだろうと思うが、いろいろな精神疾患の情報が混ざつて認識されているように思う。漫画に出てくるパニック症も発達障害もうつも双極症もパーソナリティ症も精神疾患だが、症状は違う。私も、他の疾患のことは知らないことが多く、この漫画を読んでもっと知ってきたいと思う。

自分が当事者になつたからこそ、マイノリティ側の生きづらさを知ることができた。特別扱いではなく、かといって自己責任で無理して乗り越えるのではなく、一人ひとりが自分らしく活躍できるインクルーシブ社会をつくっていったらと思う。

(E本)

\*不安や恐怖を感じることを知るために段階を点数化する。



# せかいをみる

今号はミャンマーの弾圧を逃れた映像作家・ジャーナリストたちを支援する団体Docu Athanを運営する久保田徹さんに寄稿いただきました。(Docu=Documentary Athan=ミャンマー語で声)



久保田 徹(くぼた・とおる)

1996年生まれ。慶應大在学中にドキュメンタリー制作を始める。『東京リトルネロ』にてギャラクシー賞奨励賞など受賞。2022年にクーデター下のミャンマーにて国軍によって拘束される。解放後、ミャンマーの映像作家を支援するDocu Athanを立ち上げる。

## ● タイの国境でミャンマー人の「声」を伝える

私は現在、タイにあるミャンマーとの国境の街に拠点を置き、ここで暮らしているミャンマー人のジャーナリストや映像作家を支援する団体「Docu Athan (ドキュ・アタン)」を運営している。「アタン」はミャンマー語で「声」を意味する。ドキュ・アタンでは、制作資金の提供や撮影機材の貸出し、作品の翻訳とウェブサ

寄稿

## 銃ではなく、カメラを持った人々の制作を支える 〜記録を続ける人々と共に〜

久保田 徹

(一般社団法人Docu Athan代表理事)

イトでの公開、タイでのカメラワークシヨップやクリエイターが集うコミュニティの運営、日本での上映会の開催などを通じ、ミャンマーの人々の「声」を広げていく活動をしている。

ミャンマーでは2021年2月1日にクーデターが発生して以降、クーデターに反対する市民たちが弾圧された。現在に至るまで、56000人の市民が殺害され、また2万人以上が不当に拘束された。多くの市民が弾圧を逃れ、国外に拠点を移した。今やミャンマーで暮らす全ての市民が、軍による弾圧の対象となつている。今年に入つてからは徴兵制が導入され、普通の若者も強制的に徴用される事例が増えている。私自身もまた、ミャンマー

軍による弾圧を、身をもって体験したうちの一人である。2022年7月、ミャンマーの最大都市ヤンゴンにて撮影中に軍によって拘束され、禁錮10年の判決を下された。その後、多くの方々の支援のおかげで4ヶ月弱の拘束を経て解放されたが、そのときに経験したことは、私の心に深く刻まれることとなった。

● 獄中で託された思い  
2022年11月17日、拘束が終わった日のことをよく覚えていいる。私が解放されると知ると、他の棟の囚人たちまでもが歓声を上げ、独房から出された私のほうに駆け寄ってきた。囚人として囚われていたミャンマー人のジャーナリストのうちの一人が、見送りに来た。彼は私の肩をたた

きながら耳元でささやいた。「日本に帰つてもミャンマーのことを伝え続けてくれ」。日本に帰つてからも、その囚人の言葉が心に残つた。彼は記者活動をしていたというだけの理由で、禁錮7年の判決を下されており、現在もインセイン刑務所に囚われている。彼らが声を奪われ続けているのであれば、私は声を広げるための活動をしようと思つた。それが、映像作家としての自分の役割であると悟つた。

## ● 銃ではなく、カメラで闘う人々

囚人たちに想いを託されたと考えた私は、ジャーナリストの北角裕樹らと共に一般社団法人Docu Athanを立ち上げ、ミャンマーから逃れた表現者たちを支援することに

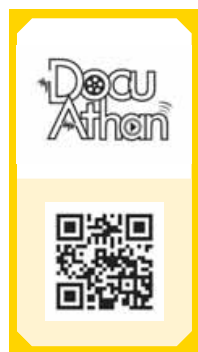




ミャンマーのクリエイターたち(写真上)。カメラワークショップの様子(写真下左・下中)。寄付で集まったカメラ機材(写真下右)。写真提供：Docu Athan

決めた。  
弾圧を逃れた人々の多くが隣国タイに拠点を移していた。クーデター以後、5万人以上のミャンマー人がタイへ逃れており、国境地帯は民主活動家やジャーナリストたちの一大拠点となっている。  
タイへ逃れた後も、安全が保証されているわけではない。タイ政府は難民を認めないため、弾圧を逃れた人々の多くは非正規滞在者として扱われ、摘発の対象となる。ミャンマーへ強制送還されれば、命はない。そのような困難の中でもジャーナリストとして発信したり、映像作家として制作を続けている人々がいる。  
ミャンマーとタイの国境を行き来し、抵抗勢力たちの戦闘を記録する戦場ジャーナリストたちもいる。チーガンという愛称で親しまれているカメランは、戦場で足を失ったにもかかわらず、義足をひきずりながらカメラを回している。著名な映画監督、ナジー氏が運営する「アーティスト・シエルトー」というコミュニティでは、数百人の芸術家たちが

集い、制作をする拠点となっている。亡命したミャンマー軍の元軍人たちは「ドーナTV (Dawna TV)」というネット放送局を運営し、ミャンマー軍が宣伝するフェイクニュースの誤りを指摘し、かつての同僚たちに民主派へ加わるように呼びかけている。  
●弱体化するミャンマー軍、新たな課題  
民主化を求める人々の絶え間ない努力によって、ミャンマー情勢に変化が訪れている。2023年10月には、抵抗勢力の一部が「1027作戦」と呼ばれる大規模な攻勢を行ってから、戦局が一変した。ミャンマー軍が急速に軍事拠点を失っていく一方、力を増していく抵抗勢力の中にはミャンマー軍と同じような残虐行為を行っている事案についても、報告されるようになってきた。  
復讐と暴力の連鎖を止めるため、メディアの人間による活動は非常に重要だ。実際、民主派の兵士たちを相手に、虐殺の歴史や国際法の重要性などについてレクチャーするワークショップが行われてい



る。「ミャンマー軍は捕虜を拷問するが、我々は国際法に則って捕虜を保護するのだ」と、ミャンマー軍を倒すために彼らと同じようになってはいけないのだと伝えている。  
ワークショップを主催する一人、チーガンと呼ばれる青年は、活動を続ける理由について、このように語る。「俺たちはミャンマー軍が憎いからといって闘っているわけではない。システムを変えなくてはならないんだ。そうしなくては、次の世代でまた同じことが繰り返されてしまう」。憎しみに囚われるのではなく、自分たちも変わらなければ、平和なミャンマーは訪れない。新しい社会を作り直すためのひたむきな姿勢に私は心を打たれた。人は歴史から学ぶことができるが、歴史は記録がなくては生まれない。私たちはより良い未来を作るために記録を続ける人々と共に活動すると決めた。

# 「あの日から始めたこと」

## 片岡紀子

(学校地域コーディネーター、保育士、NPO法人患者スピーカーバンク事務局)

今から約18年前、ステージIVbのがん診断を受けた。最初の5年は治療を進めながら、水泳、機織り、大学編入など、定年退職後にやろうと思っていたことを始めた。

次の5年、残された時間で何を残せるのかを考えているときに「患者スピーカーバンク」に出会った。患者としての経験や感じたことを話すことで、誰かの役に立てたらと思ひ、講演活動を始め現在に至っている。

そのような中で御縁をいただき、義務教育学校の学校地域コーディネーターとして働き、7年目



患者スピーカーバンクは、患者や障がいのある人を、企業や医療機関、学校等でその経験を語る「患者スピーカー」に育成し、社会に声を届ける活動をしている。講演中の片岡さん。

になる。東京ボラン

ティア・市民活動セ

ンター「ゆめ応援

ファンド」の支援を

いただき、患者ス

ピーカーバンクの

仲間と共に、授業

でがんの経験を話したり、生徒と一緒にグループ

ワークをしたりすることもある。

「困ったときは誰かに相談することが大切、が

んになっても働ける、何より生きること」と発信

できたら良いと思っている。

生きることにこだわるのは、もう一つ理由があ

る。それは、2006年の「シンドラ」社製エレ

ベーター事故」で亡くなった息子の後輩の無念を

思うからである。

事故の日、彼は高校の「野球班」の仲間たちと

バットを買いに行った帰りに、自宅マンションの

エレベーターで、お母様の目の前で亡くなった。

息子は、ご遺体が運ばれる様子を伝えるテレビ放

送を見つめながら、

「バットを持たせなければ良かった」

「バットを持たせなければ良かった」



毎年発行している活動記録と、亡くなった高校生についての書籍。

『ネットワーク』  
編集委員企画  
第3回

とつぶやいた。

それから、ご遺族や協力者の皆様と一緒に、エレベーターを含めた「安全と命の大切さ」について活動をしている。毎年の命日には、安全の日の集会を開催（8年前より東京都港区と共催）し、活動冊子を発行して訴えてきたが、風化させないために石碑を建立する運びとなった。

そこには、「与えられた時間は、みな同じなのだから、その時間をいかに有意義に使うかだと思う。限られた一日という時間を、他人に優しく、自分に厳しくできるように、その一日が有意義であるように過ごして行きたい」という彼の言葉も刻まれる。多くの方に知っていただけたら、彼がいつまでも生き続けられると思う。

あの日から、今を積み重ねることで、ここまで来た。もう少しだけ、続けていければと思っ

本誌編集委員の片岡紀子さん（患者スピーカーバンク事務局）に寄稿いただきました。



患者スピーカーバンク  
HP



# ネットワーク

本誌のバックナンバーは  
右記からご覧ください。



～本誌391号より～

# 読者の声



読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

## ◆思い立ったがボラ日 グリーンバード高円寺チーム

・「できる限りの精神」という motto、【ごみ拾いをしていて自分たちを見てもらう目的】といった2点から、ボランティアに対する新しい視点を得ることができました。

## ◆【特集】

### ボランティアはじめの一步

・ボランティアチャート診断が楽しめました。参加する前の心構えに関して参考になりました。  
・ボランティア活動で参加した際に困ったときの相談先を紹介していただくと良いかなと思いました。

### ◆市民活動用語のキンコシキ

・受け入れる側としては、ボランティア参加者の方に「無償では申し訳ない」という気持ちが生じてしまいがちです。参加された方の思いが「社会を良くしたい」という気持ちで「無償で」参加されていることを意識し、感謝の気持ちを忘れずにしたいと改めて感じます。

## ◆【編集委員企画】 拝啓 岡ちとせ様

・多世代で様々な方が携わっている岡さんのおいえ、きつと運営されている方のお人柄が良いのでしょう。讚美

歌の練習からフッキー作りまで多様な人に愛される活動は良いなあと思いました。

## ◆せかいをみる

### ケニアのLGBT難民支援と自立

・内容が衝撃的で印象に残りました。国際的な問題や自分の身の回りに起こらない問題は認識や問題視しづらく、意識を持ちづらいため、表現が過激になっても事例を伝えることの大切さを実感しました。

## ◆つばやきブレイク 激レア

・筆者の気持ちが非常に伝わるよいコラムでした。僕自身、非常に特殊な環境で育ってきて、今も自分の中で消化しきれない事柄がたくさんあるので、『正欲』という本を読んではたくなりました。

## ◆いいものみい〜つけた！ プレート

・サコッシュや野菜のゴロゴロカラーを一目見て、まだまだ若い僕でもこの作業所に行ってみたい！という気持ちが溢れました。

お気軽にご意見・ご感想を  
お寄せください。



本誌で使用しているQRコードは、(株)デンソーウェブの登録商標です。

## 東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<https://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

### 利用

会議室	会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料 ※会議室AB通し(80人)
貸出機材 申込み	印刷機(1台)紙持ち込み、点字プリンター 他 4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

### 情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。<http://www.tvac.or.jp/>

### 開所時間

火曜日～土曜日：9時～21時 / 日曜日：9時～17時  
(月・祝祭日・年末年始除く)

### 交通アクセス

JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線  
出口B2b)飯田橋駅下車

## ネットワーク

発行人 山崎美貴子

編集委員 上杉真雅(メイクスマイル/オレンジフラッグ)

江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)

片岡紀子(患者スピーカーバンク)

亀川悠太郎(葛飾区社会福祉協議会)

小池良実(岡さんのいえTOMO)

長畑 洋(TDU-隼野大学)

中原美香(NPOLISK・マネジメント・オフィス)

野村美奈(武蔵野会 リアン文京)

室田信一(東京都立大学)

TVACの公式ソーシャルメディア



編集・発行：東京ボランティア・市民活動センター  
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1  
セントラルプラザ10階  
TEL：03-3235-1171 FAX：03-3235-0050  
E-mail：nw@tvac.or.jp

印刷：島津印刷(株)  
デザイン：東京ボランティア・市民活動センター/島津印刷(株)  
表紙イラスト：フローラル信子

2024年10月20日発行(通巻No.392)  
ISBN 978-4-909393-58-6 C2036  
定価400円(本体364円+税10%)  
本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。



1 0 0 1 1 2 3 2



制作のつどつどで、講座内でデザイナーに入ってもらって合評をしたり、印刷前には複数の人が校正を行う。



季節を表す植物や生き物が地面を覆いつくす様をデザイン化したカレンダーの完成直前の検討用出力。



希望者によって作品数は毎年異なる。2025年のカレンダーは3作品。各1,000円(税込)。創造集団440HzのWeb STORE(右QRコード)にて販売中。



写真提供：TDU・零穿大学

# いいもの みい~つけた!

このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。

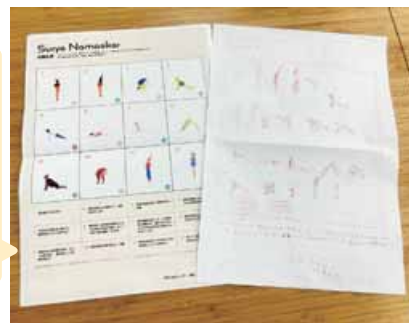
Vol.  
51

## 月日のうつろいを いろどるカレンダー

TDU・零穿大学は、日本で唯一のNPO法人が運営する大学。18歳以上の様々な「生きづらさ」を経験した若者たちが在籍しています。

TDU・零穿大学のデザイン講座では、色と形で生活を時には楽しく、時には心豊かにしえるのがデザインだと考えています。デザインに関心のある学生がプロのデザイナーにアドバイスをもらいながら、使ってくれる人の気持ちが潤うようなカレンダーを「誰が」「どんな場所で」「どんなことを求めて」使うのかを想いながらつくっています。

アイディアの段階で、講座で発表をして講師や他の学生からいろんな質問やアイディアを寄せてもらってカレンダーにしていく。



### NPO法人 TDU・零穿大学(てきせんだいがく)

事務所住所 〒160-0022  
東京都新宿区新宿5-11-30  
第五葉山ビル3F

お問合せ TEL 03-6205-6079  
FAX 03-6205-6078  
MAIL info@tdu.academy

WEB <https://tdu.academy/>

SNS <https://www.facebook.com/TDUtokyo>



TDU



Facebook

# 作り手インタビュー



工程のひとつひとつに、様々な人が手をかけてできあがる、『いいもの』。制作にまつわるお話をうかがいました。

## 自分たちの心が動くものをつくり、使う人には暮らしのいろどりとなるように

TDU・隼穿大学では、在籍する若者たちと同大学の出身者が設立した映像・デザイン制作会社、創造集団440Hzとのコラボレーション企画としてカレンダーを制作しています。今回、制作に携わった阿部大輔さん、内木場悠さん、鈴木かときさんにお話をうかがいました。

—カレンダーづくりのきっかけや経緯を教えてください。

日常生活で使える身近なものをつくりたいと考え、2007年頃から制作しています。デザイン講座を選択する学生のうち、希望者が担当しています。4月頃からスタートして、デザインを発表しては仲間のコメントや意見をもらって作り上げていきます。

決めごとは、判型(サイズ)だけです。最初の頃は、組み立て式のものや、缶バッジのカレンダーなど、体裁が自由過ぎたこともありましたが(笑)、この数年は、デザインは自由にして判型はそろえるという形にしています。

—2025年版が10月から販売されますね。どこで購入できますか？

創造集団440Hzのウェブサイトのほか、地元のセレクトショップに置いていただいたり、隼穿大学の催しのときにも売っています。作り手の顔が見えると買ってくださる方も多いです。他のフリースクールで委託販売してくれていたこともあります。

売上がプレッシャーに感じ、自分が面白いと思うものをつくれないうきもありました。けれど、自分の心が動くようなものでないと人にも伝わらず売れないと、次第に実感していきました。つくりたいという気持ちを大切にしたいので、お金のことは創造集団440Hzで考え、学生たちは自由にデザインを手掛けています。

—カレンダーに込める思いなどあればお願いします。

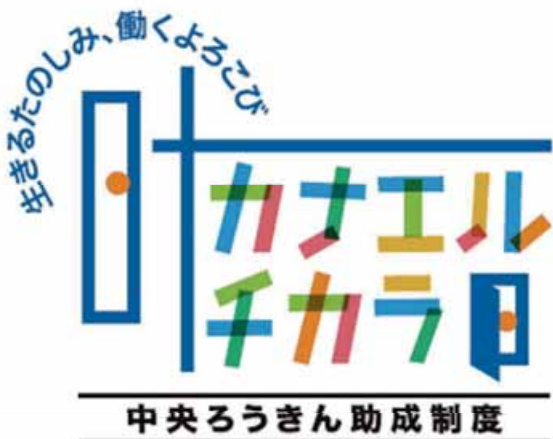
紙製のカレンダーの需要は減っています。なので、実用性より壁に飾って楽しんでいただくなど、使う人の日常にいろどりを添えることができれば、という想いでつくっています。使ってくださる方には感想をいただけたらうれしいです。



デザイン講座では平面構成・色彩構成の理論を学びながら、同時にカレンダー、名刺、カードなどの制作を体験していく。写真提供：TDU・隼穿大学



制作を担当した、阿部大輔さん(写真左)と内木場悠さん。中心にあるカレンダーは学生たちが使用しているもので、内木場さんがデザインをした。



### 中央ろうきん助成制度



#### 1. 対象事業・活動

- 新たな事業の立ち上げを応援します。既存の事業・活動に新たな視点や切り口・要素や方法を加えたものも含めます。
- 「生きるたのしみ」という面では、広く“ひと・まち・くらし”づくりに役立つ発想豊かな事業・活動を想定しています。
- 「働くよろこび」という面では、働く人が直面する、“疾病治療・介護・子育て等と仕事の両立”“働くことに困難を抱える若者や女性・高齢者の自立就労支援”等、多様な働く場・機会の創出に焦点を当てた事業・活動を想定しています。
- 特に、公的な補助や支援の対象とならない／なりにくい、自主的かつ先駆的な事業・活動を応援します。

#### 2. 助成対象となる団体

上記1.対象事業・活動に取り組む市民団体で、以下のすべての要件をみたす団体とします。

- 民間の非営利団体で法人格を有すること（NPO法人、一般社団法人等）。
- 応募時点で上記法人格の取得後、1事業年度経過していること。
- 主たる事務所の所在地および主な活動の場が、関東エリア1都7県内（茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨）の団体であること。
- 新しい事業を立ち上げるための基礎的な力（代表者責任が明確であり、会計処理が適切に行われている等）を有していること。
- 団体の目的や活動内容が特定の政治・宗教に偏っておらず、反社会的な勢力とは一切関わっていないこと。

### 2025 応募要項

応募受付  
期間

2024年10月1日火  
～10月31日木【応募メール必着】

助成対象  
期間

2025年4月1日火  
～2026年3月31日火

助成年数・  
金額(上限)

毎年の応募・選考を経て、  
最長3年間継続助成します。

1年目：50万円 / 2年目：50万円 / 3年目：100万円

助成金額：総額1,500万円(上限)

中央労働金庫は、誰もが「生きるたのしみ」と「働くよろこび」を享受できる地域社会の創造に向けて、生活者・労働者の視点に立ち、地域の課題解決をめざした新たな自主事業の開発に取り組む市民団体（NPO法人等）を応援しています。

本助成制度のテーマに貢献する事業・活動に取り組んでいる皆さまからの積極的なご応募をお待ちしております。

#### 応募方法

※中央労働金庫ホームページにて、必ず詳細をご確認ください。

- (1) 「応募要項・応募用紙・記入の手引き」の入手方法  
下記 URL または二次元コードからアクセスし、ダウンロードしてください。
- (2) 応募用紙の記入にあたって  
『記入の手引き』を参考に、パソコン（Word形式）で作成してください。
- (3) 提出書類（メールにて提出）
  - 応募用紙（Word形式） ● 定款（PDF形式等）
  - 最新の事業報告書および決算書類（活動計算書、損益計算書、貸借対照表、財産目録等）



### 助成制度の詳細・応募用紙等はこちら

<https://chuo.rokin.com/aboutus/csr/subsidy/application/>



応募書類提出先・お問い合わせ先

中央労働金庫 総合企画部(CSR)担当:山崎  
TEL:03-3293-2048 (平日9時～17時)  
E-mail:npo@chuo-rokin.or.jp

中央ろうきん

[2024年9月1日現在]